

# 日経アーキテクチュア

NIKKEI ARCHITECTURE

平凡だけどすごい

# 現代の腕利き



住宅とオフィスを同一階に設けた超高層  
建築巡礼・法隆寺



フォーカス 建築

女川町仮設住宅 (宮城県女川町)

# 3階建てのコンテナ仮設

土地のない沿岸地域で戸数を確保







3階建て住棟。サイディングを張った輸送用ISOコンテナを市松に積み上げてコンテナ用ジョイントで固定。その間の「フレームコンテナ」と名付けた空間には、大きな掃き出し窓を設けた (写真・安川千枝)





A  
B  
C





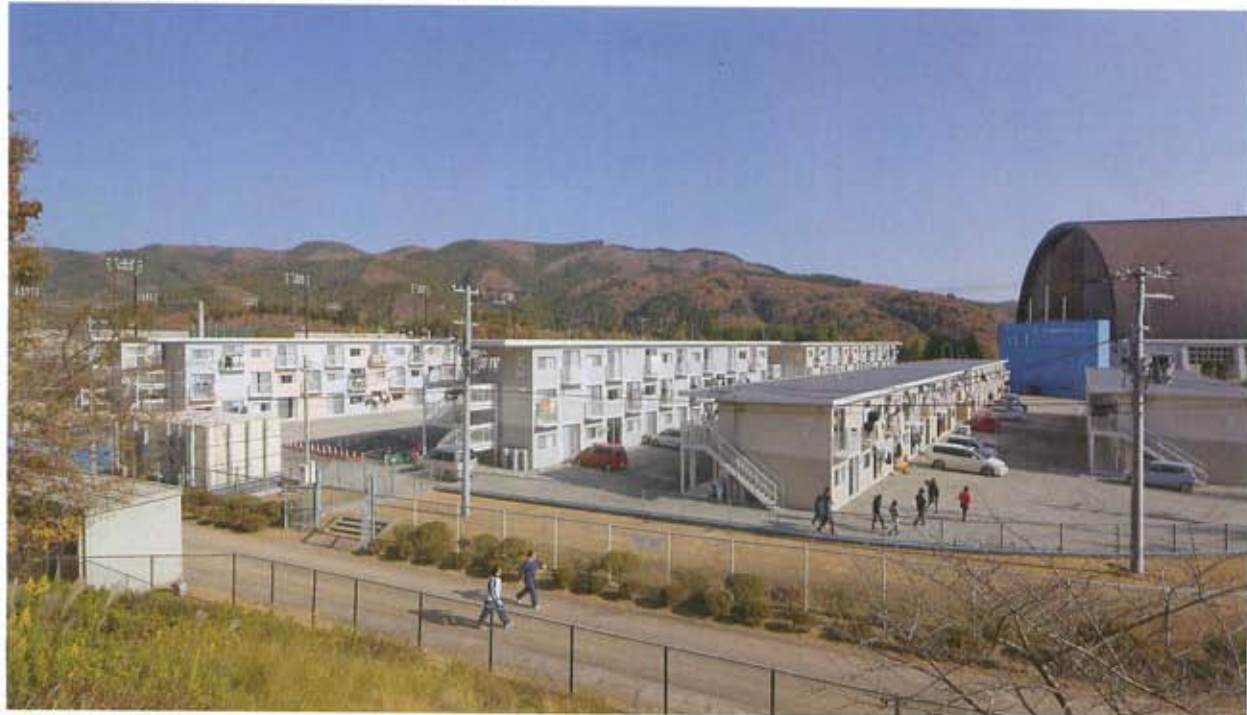


**A** : 外廊下から隣接住棟を見る。リビングのある掃き出し窓部分と水回りや寝室を配したコンテナ部分を入れ子状に組み合わせ、住戸間ですできるだけ音の影響を受けないよう配慮している **B** : 北側の外廊下 **C** : 住棟間には各住戸の目の前に駐車スペースを確保 **D** : 8坪の1LDKタイプ。通常の仮設住宅に収納棚やハンガーパイプはないが、ここでは全戸に標準装備。棚を購入しなくても、部屋をすっきり使えるようにした。ボランティア・アーキテクト・ネットワークが募った寄付金を基に、185人のボランティアの手で製作・設置した。照明とカーテンは良品計画の提供。紙管の脚もつけられるテーブルは森林保全体more Treesとルイ・ヴィトン・ジャパノの協力でつくった。過熱環境は、早稲田大学田邊研究室の実測に基づく解析によると、外気の最低気温が-4.8℃~-4.2℃で推移する1月末から2月初めの3日間、コンテナ仮設住宅の最低室温は3.5℃~-7.7℃。近接して建てプレハブ仮設住宅の0.2℃~3.0℃を上回る(いずれもカーテンを開けた場合) **E**~**H** : 入居者の住戸内。備え付けの収納棚をそれぞれ工夫しながら利用している様子が見られる





写真1 高台の野球場に2・3階建て9棟を建設



野球場の敷地に460人が入居する189戸の住棟を並べた。右奥に青いスコアボードが見える。使用後に原状復帰させるため、地中に埋設された透水管を破損しないよう輸送時の固定用ジョイントを溶接した鉄板の上にコンテナを置いた。外壁まわりは石膏ボードを二重張りするなどして3階建てで求められる準耐火構造に対応させた

2011年11月6日、宮城県女川町の3階建て応急仮設住宅(写真1)で入居が始まった。2階建てを含む住棟9棟は、コンテナを積層させたものだ。坂茂氏率いるボランタリー・アーキテクト・ネットワーク(VAN)が提案した。

「居住性の低い現在の仮設住宅は、日本人の忍耐力とおとなしさに頼ったシステムだ。十分な面積を確保するのは無理でも、もっと住み心地の良い建物はできる。居住性を高め、高密度化して生み出す空間をコミュニティー形成の場所に活用するなど、被災者の生活環境を改善すべきというメッセージを込めた」と坂茂氏は話す。

敷地は、女川町総合運動公園の一面にある面積1万2320m<sup>2</sup>の野球場だ(図1)。建物は、長さ20フィートの海上輸送用コンテナを市松に積み上げている。複層にしたことで、平屋であれば納まりきれない189戸を確保した。その結果、「仮設住宅の建設を予定していた3つの学校のグラウンドを潰さずに済んだ」(女川町復興対策室都市計画係の小林貞二係長)。コンテナ製なので、使用後の移設や転用が容易という利点もある。

### 多くの寄付と協力を得る

仮設住宅の基準に沿って設計した住戸は、6坪のワンルーム、9坪

の1LDK、12坪の3LDKの3タイプ。これらを住棟内で混在させるよう配置している(図2)。

住棟は9棟のうち6棟を3階建てにし、すべて2階建ての場合に比べてゆったりと配置した。「居住者同士が視線を気にせずに過ごせる。住戸の前に各戸1台の駐車場も設けることができた」と小林係長。さらに敷地中央には、マーケットやアトリエ、集会所という交流施設を建設した(写真2)。

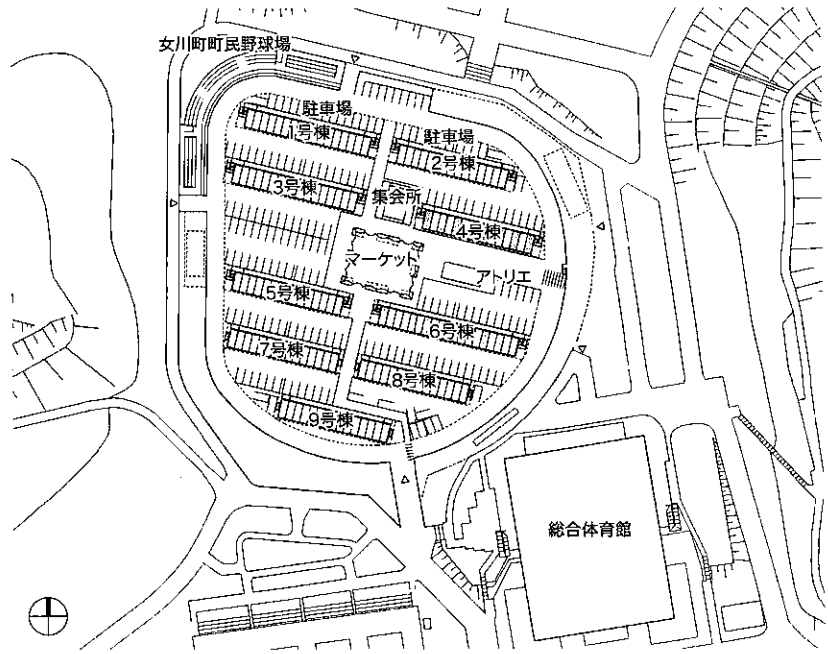
市松に配したコンテナの間は鉄骨フレームで組み、掃き出し窓を設置している。掃き出し窓を通してより多くの採光と通風を得るほか、そのまま外に出られるように

して外部とのつながりを高めた。

室内の使い勝手にも目配りした。ハンガーレールや収納棚を各室に標準装備した。「通常の仮設住宅にはきちんとした収納がなく、居住者はバラバラな収納用具とあふれ出たモノのすき間に住んでいる。ここではあらかじめ収納棚を設置して、入居すればすぐ快適に暮らせるようにした」(坂氏)。

マーケットやアトリエは寄贈を得て建設し、住戸内の収納棚はボランティアが製作・設置した。こうした付加価値要素は仮設住宅の予算に含まれないので、外部協力者の力を結集して実現した格好だ。

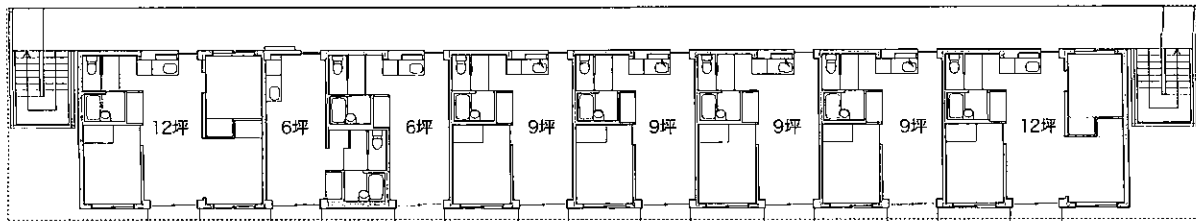
図1 住棟の間に駐車場を配置



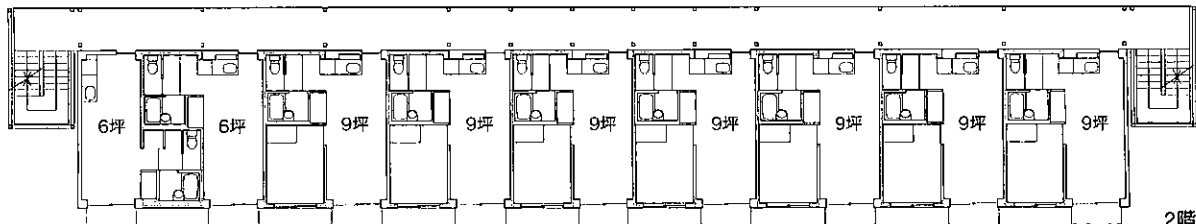
平面図 1/2,500

北側の1号棟から6号棟までを3階建て、南側の7号棟から9号棟までを2階建てとしている

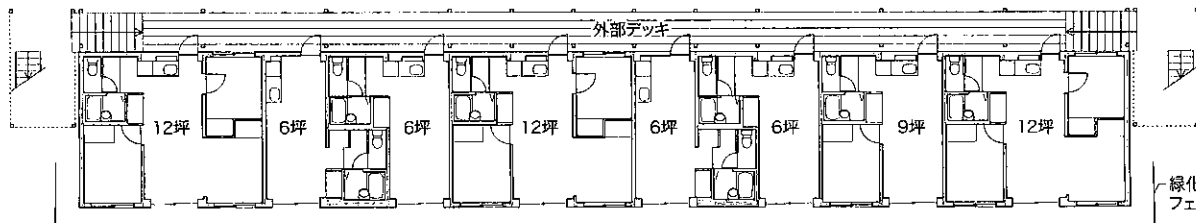
図2 3タイプの広さの住戸を混在させた住棟(3号棟)



3階平面図



2階平面図



3号棟1階平面図 1/300

ワンルームの6坪タイプでは、1.5スパンの住戸を入れ子状に組み合わせた。1LDKの9坪タイプは2スパン、2LDKの12坪タイプは3スパンをそれぞれ利用する



写真2 住棟間の広場にコミュニティー施設を設ける



左上：マーケットやアトリエを建設中の4号棟前の広場まわり。空いたスペースは駐車場として利用される 右上：コンテナを支持材に利用したテントを張り、居住者や町の人が出店できるようにしたマーケット「坂本龍一マルシェ」。坂本龍一氏の寄贈 左下：紙管を用いて傾斜屋根の空間をつかったアトリエ。ワークショップや教室を開催する予定だ。千住博氏の寄贈 右下：集会所。この建物だけは県の予算でつくった

しかし坂氏は、「本来このレベルの生活環境は必要だ」と訴える。

### “見切り発車”の綱渡りも

着工までの経緯はこうだ。

4月19日に宮城県は、県内事業者や輸入材料を扱う住宅会社のリストを基に地元市町村が仮設住宅の事業者を選べる制度を始めた。リストに載せる事業者の公募を知った坂氏は早速、今回の施工を担当することになるTSP太陽と組んで4月28日に応募し、選定された。この段階で発注が約束されるわけではないが、仮設住宅を実現するに

は必要な手続きだ。

5月28日には安住宣孝町長（当時）へのプレゼンテーションを敢行。ただし、「それ以前から坂さんは何度も提案のために町を訪れていた」と小林係長は振り返る。その後VANは町と事前相談を重ねながら計画案を練り、6月30日に町長の内諾を得た。7月20日過ぎの町議会議決、3階建てに対する県の了解を経て、8月初旬の着工へとこぎ着けた。

複層の建物は平屋に比べて外廊下や階段の工費が加わるが、1戸当たりの外構費は減る。建物と外構

で1戸当たり700万円弱という建設費は、「建物500万円+外構150万円+断熱関連の追加費」という一般の仮設住宅と同等だ。

計画の過程では「議決を待っていないでコンテナの発注が間に合わない。非公式でいいからOKを出してほしいと町長に依頼して見切り発車した。町長が腹をくくってくれたおかげで作業を進められた」（坂氏）という綱渡りも。3階建て仮設住宅が実現した背景には、坂氏ならではのフットワークと地元首長の決断が欠かせなかった。

（守山 久子＝ライター）



